

高島華宵《月下の小勇士》1929年／弥生美術館
 埼玉県立近代美術館・後期展示
 島根県立石見美術館・後期展示



化して描いた肖像画や仏像
 ・異色などところでは、寺院で僧侶の男色の相手をとつめた《稚児草紙》に現れる肉感的な少年たち
 ・近世の祭礼や芸能をになう若衆たちに彩られた風俗図
 ・人気役者・相撲力士・物語のキャラクターなどの人気者が躍動する浮世絵
 ・神話的な英雄像が描かれる明治中期の復古調の絵画
 ・写実的な表現と浮世絵の系譜がミックした新聞や大衆雑誌などの挿絵

・猛々しい男性イメージが登場する戦前・戦時中のプロパガンダ絵画・写真類
 ・従来のなジェンダーの概念を揺さぶる男性表現が生まれた戦後のサブカルチャー
 ・LGBTQの文脈を持つ男性像など、主なものだけでも、多彩な作例が挙げられます。これらは時代の区分ではつきりと交代するのではなく、徐々に後退していく・併存する・リバイバル現象なども踏まえつつ、時とともにゆるやかに移っていく印象です。個々の作例が果たして美男に映るかどうかは、時代と個人の好みにより変わりますが、制作された当時からこれらが人々のさまざまな種類の憧れを集める男性像であったことは、一貫しています。

—— 社会の情勢や流行、男性観などが反映された作品が数多く存在してきたのにもかかわらず、美男画」というカテゴリーが成立しなかったのはなぜで

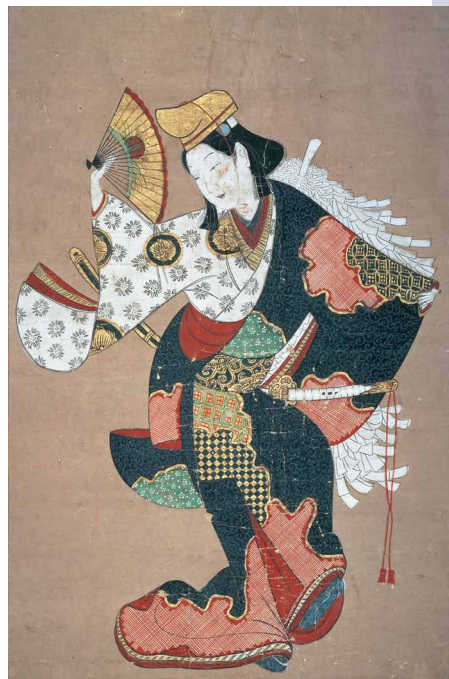
しょうか？ また、現代において「美男画」は市民権を得ているのでしょうか？
五味 日本の視覚表現として伝統的には、面貌そのものよりも、髪型や身に着けているものによる描き分けが重視され、顔かたちを現実そっくりに表すことよりも、類型化したパターンのなかに個々の特徴を示唆する傾向が強かったため、美男とされる人物であっても、現代の眼からすると「美男」に映らないということがまあります。しかし、近代になって外国から写実的な表現が入ってきて、生身の肉体としての美醜が描けるようになって、美男「はやはり少ない。なぜなのでしょう？ 複合的な理由が考えられると思います。
 男性の場合は、外見だけでなく、外見よりも属性（生い立ち、階層、業績、経済力、身体能力、技芸、知性、精神性など）が大切であるという価値観の存在が、男性を外見のみで判断する・されることへの忌避感を生みます。そのため、ヌードと同じで、ファッションの分野で美男

埼玉県立近代美術館

学芸員 五味 良子

日本美術において「美男」とはどういった存在なのか、また今後「美男画」というジャンルは発展していくのか。美男をテーマとする展覧会「美男におわす」の開催にあたり、埼玉県立近代美術館の五味学芸員に日本美術における「美男」について話をきいた。

—— 日本美術において「美男」像の歴史は現在に至るまで、どのようなものとして表現されてきたのかお聞かせください。
五味 日本の視覚文化の中で、今日いうところの「美男」像は、どのような形で登場するでしょうか。大きな流れとしては、時代をさかのぼるほど神仏や物語や歴史・伝説上の人物など高貴な身分の



絵師不詳《大小の舞図》17世紀／板橋区立美術館
 埼玉県立近代美術館・後期展示
 島根県立石見美術館・前期展示

ものが多く、時代をくだるにつれて理想化された支配者層や市井の人物など、より身近な現実の存在へと美男像は変わっていききました。その後「国家の求める、名もなき兵士」として好ましいとされた身体が同一化すべき対象として、さらに現代に近づくとする意味で現実を超えた／もうひとつの現実ともいべきアニメや漫画などのオルタナティブな世界へ向

かう、非（超）現実↓現実↓代替現実という方向性を美男像の系譜に見て取れるかと思えます。代表的な例を、少し具体的に辿ってみましょう。
 ・奈良・興福寺の阿修羅像や京都・東寺の帝釈天像に代表される神仏系の図像
 ・平安期の源氏物語絵巻などに見られる貴公子の姿
 ・中世の武士や僧侶を写実的にかつ理想

いえます。
こうした経緯を踏まえると、近年、フラインアートの分野で文字どおり「美男画」をテーマとする先駆的存在の木村了子氏、若手の市川真也氏などの試みは画期的です。美男画はいま、市民権を得る過程にあるのではないのでしょうか。

——近年、男性にとって美しさは非常に重要な位置を占めてきていると感じます。変化しつつある価値観は日本のアート界に影響を与えているでしょうか。また、「美男」というモチーフはどう変化していくと思われますか？

五味 アートには社会状況を映す鏡、まだ世の中の多くの人々がはつきりと気づいていない、少し先の世界の予兆をキャッチして示すという側面があります。社会が変化する以上、アートも必然的に影響を受けるでしょう。価値観が多彩になれば、現代のアートがテーマとするものも、同様に幅が広がります。人々の好み・流行が、かつてのように「今年はコレ、それ以外はダサイ、古い」というような一

元的に動く時代ではなくなり、何を美しいと感じるか、誰を何を「推す」か人によって異なることが以前よりは許容される世の中となりました。他人にとって全く美男でなくても、自分にとっては最高に美男というシチュエーション、またその逆も起こりえます。また、容貌を重視する人がいれば、その他の資質も含めて美しさや好ましさを感じる人もいるでしょう。美醜のみが絶対の価値基準になつてしまつと問題ですが、ジェンダーを問わず自分にも他人にも美を求める／求めないが、そしてどういふものを美とするかが、誰かに強制されるものではなく個人の自由な選択になるのが望ましいと個人的には考えています。固定的なジェンダーバイアスが薄れ、男性を美しい存在としてまなざすことへの抵抗感が減り、ことさら珍しいことでもないものとして育つ次世代の表現は必然的に、現在ともまた違ったものになり、「男性の美しさ」をテーマとする表現は今後さらに多様化するのではないのでしょうか。



木村了子《男子楽園図屏風 - EAST & WEST》(左隻) 2011年/作家蔵/撮影:宮島径

子が登場する際には、原則的に何らかの理由や意味づけ(美しいだけでなく〇〇にも秀でている/歴史上美男とされている偉大な人物である、など)が求められました。写実的な表現が導入されて以降、モデルを使っている場合は、単なる「男性像」となり、たとえモデルが美男子であっても「美男像」とはならないのです。残された作品を美男とみなすかどうかは、観る人の判断(主観)となるわけですが、全く同じ内容であっても、例えば「ナルキッソスとしての自画像」のようなタイトルがつけられると、「美男」であるというお墨付き(ある種の客観性)が与えられるという具合です。

近代以降、現実の再現・記録は写真や映像の役割となり、従来にならぬ表現の開拓を求めていったモダニズムの美術の潮流の中では、単なる美しい人物や風景は何か狙いが無い限りそのままでは作品として成立しない、せいぜい習作扱い、という状況があります。したがって「美男画」はいっそうフラインアートの表舞

台に上がりにくい背景となります。制作者・受容者とも主に異性愛の男性が想定されてきた文化の中では、単なる美しいだけの名もなき男の図像というのは少数です。日本の場合、近世の浮世絵(特に男色の相手としての青少年像、あるいは男色女色両道の対象となりえた男女のペア図)や戦後の若年女性向けのマンガ、LGBTQの系譜の表現などが共有されるフィールドの中で美男画は登場します。

大正期以降に広まった近代医学の中で、当時の知見では同性愛はアブノーマルなものとみなされたため、それを疑われるようなあからさまな表現は近年まで避けられる傾向にありました。フラインアートのメインストリームよりもむしろ、大衆の欲求やパブリックな場で表に出にくい関心をダイレクトに受け入れるサブカルチャー(アンングラ美術や映画、漫画、アニメなど)の方が、「美男画」に対してはよりオープンで自由度が高かったと



木村了子《男子楽園図屏風 - EAST & WEST》(右隻) 2011年/作家蔵/撮影:宮島径